

Title	陳独秀の中共「復党」・協力問題と「トロツキー派に答える手紙」
Sub Title	How Chen Duxiu's attempt to cooperate with CCP in 1937 was disturbed by "reply to a letter from the Trotskyist"
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.11 (2018.),p.114(13)- 126(1)
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20180331-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陳独秀の中共「復党」・協力問題と 「トロツキー派に答える手紙」

長堀 祐造

はじめに

1937年7月7日の日中全面戦争の開始で日本軍機の爆撃が、陳独秀が投獄されていた南京監獄（江蘇第一監獄）にも被害を及ぼす。翌月、陳独秀は胡適などの援助を得てこの国民党の獄からようやくにして解放されることとなった。陳独秀はしかし、中国トロツキー派の活動拠点、上海には向わず、武漢に行き、その後、四川省重慶を経て、同省江津で晩年を過ごし、当地で没することになるのだが、この出獄直後の一時期、陳独秀と中共との間には接触があった。抗日戦争に進歩性を認める陳独秀は軍事力を持つ中共との協力を模索し、中共の側にも知名人士、陳独秀の獲得は、抗日統一戦線強化にとって有利だという思惑があった。

しかし、両者の思惑はすれ違い、半年あまりでこの協力模索は座礁する。モスクワから延安に到着した王明は、スターリンを後ろ盾に、抗日では誰とでも協力可能だが、トロツキストだけは例外だとして、中共の延安指導部が進める陳独秀との「復党」・協力交渉を認めなかった。そして、このときトロツキストを例外とする根拠となったのが、陳独秀・中国トロツキー派＝漢奸説であり、それは実は馮雪峰が執筆し、魯迅の了承なしに魯迅名義で発表された「トロツキー派に答える手紙」に淵源するものだったのである。本論では、この陳独秀のいわ

ゆる「復党」問題（正確に言えば、中共側には陳独秀を復党させたいという希望がある⁽¹⁾一方、陳独秀側には復党の意思はなかったのであり、陳独秀側から言えば、中共との「協力」問題とすべきである）について、その経緯、及びその帰趨に影響を与えた魯迅を名義人とする「トロツキー派に答える手紙（答托洛斯基派的信）」との関わりとを考察する。

1. 陳独秀の「復党」問題の経緯

唐宝林・林茂生編『陳独秀年譜』（上海人民出版社、1988年）の記載と日本語版『陳独秀文集』第3巻（平凡社東洋文庫、2017年）の江田憲治による注に依拠して⁽²⁾、まずは1937年8月23日の陳独秀出獄後の中共との「復党」・協力問題の経緯について、やや詳しく日を追って見ておきたい。

1937年8月13日、日本軍は南京を爆撃し、陳独秀のいた江蘇第一監獄も被害を受ける。こうした状況を心配した、陳独秀の北京大学文学長時代の学生で当時、南京の金陵女子大学中文系主任教授だった陳鍾凡は胡適らと保証人となって陳独秀の保釈を求める運動を開始した。おそらくは胡適の依頼を受けたと思われる国民政府最高国防会議副主席汪精衛も、同会議主席の蔣介石に陳独秀釈放を働きかけた。その結果、国民政府は1933年6月に陳独秀に言い渡されていた有期徒刑8年の確定判決を3年に減刑する措置をとったため、陳独秀は8月23日に出獄を果たす。国民政府司法院が釈放の条件とした悔悟の情の表明には、陳独秀は応じなかったのであるが。陳独秀はとりあえず、同じく北京大学在職時代の学生にして五四期の学生運動指導者で当時、国民党国立中央研究院語言研究所長兼中央大学教授であった傅斯年家に滞在し、月末には陳鍾凡の家に移って半月ほど滞在した。

8月下旬、このころから陳独秀の「復党」・協力問題が発生する。トロツキスト羅漢⁽³⁾は、南京八路軍弁事処に葉劍英、李克農を訪ね、

いまだ国民党の獄中に残されたトロツキー派メンバーの救援を依頼し、快諾された⁽⁴⁾のだが、羅漢はこのとき独断で、中国トロツキー派が5年以上前の、1932年1月28日の上海事変に際して中共に提起した「抗日合作」の旧方針を再提起した。すると、葉・李は延安への報告を約束し、羅漢を延安に招請したのであった。

9月初め、羅漢は西安に赴き、八路軍弁事処責任者・林伯渠と連絡を取り、延安行きを協議したが、結局、延安とは電報のやり取りで、陳独秀と中共との「復党」・協力問題を協議することとなった。中共側は、毛沢東・洛甫（張聞天）名義で、中国トロツキー派との協力実現のための前提条件として以下のような内容の3条件を提示した。

- 1) トロツキー派のすべての理論と行動を全面的に公に放棄するとともに、断固としてこれに反対すること。トロツキー派組織と関係を断つことを公に声明し、それまでのトロツキー派加入の誤りを認めること。
- 2) 抗日統一戦線擁護を公に声明すること。
- 3) 実際行動でその擁護の誠意を示すこと⁽⁵⁾。

羅漢はやや時をおいて、これを陳独秀に伝えることになるが、陳独秀にとっては受け入れ難い内容であったことは明白である。しかし、陳独秀はこれ以後、9月中旬までに葉劍英と二度、博古（秦邦憲）と一度、会見して意見交換している⁽⁶⁾。陳独秀は抗日統一戦線には賛成であったが、中共の路線については批判し、トロツキズム放棄問題には答えなかったという。

9月9日、陳独秀は南京を離れ、武昌へ向けて船で出発し、14日までは目的地に到着していた。中国トロツキー派臨時中央は上海にあったのだが、陳独秀が上海に向うことはなかった。陳独秀はトロツキー派臨時中央の極左セクト主義に不満で、彼らの路線に活路はないと判断していた⁽⁷⁾。

9月15日、西安から南京に戻った羅漢は、葉劍英・博古に延安、陳独秀双方の反応を報告した。一方、中国トロツキー派臨時中央は、10

月1日、羅漢のすすめる陳独秀と中共との協力模索の動きを、「トロツキー派組織とは無関係」と緊急声明を発した。

10月6日、陳独秀は武昌の華中大学で「抗日戦争の意義（抗戦意義）」を講演し、抗日戦争は「被圧迫民族の帝国主義に対する革命戦争」で「進歩的意義がある」と主張した。

10月16日、羅漢は中共代表団の董必武とともに陳独秀を訪問し、中共の3条件を伝達した。もちろん陳独秀は不同意で、逆に7箇条の「抗戦綱領」⁽⁸⁾を起草し、羅漢を通じて博古に伝達した。博古はこれが中共の方針と合致すると認め、董必武、周恩来の武漢着後に陳独秀と意見交換することを提案した。そしてその後、周恩来⁽⁹⁾は羅漢に対し、陳独秀らトロツキー派内の抗日民族戦線支持派には「匪徒」という罵詈雑言は使用しないと通告したという⁽¹⁰⁾。

11月20日、中共機関紙『解放』は「陳独秀先生はどこへ行く（陳独秀先生到何処去）」を掲載、陳独秀が武漢で行った講演中の抗日戦観を評価し「中国トロツキー派とはすでに大きな違いがある」と賞揚した。その翌日、陳独秀は「どのようにして金のあるものには金を、力のあるものには力を出させるか（怎樣使有錢者出錢有力者出力）」⁽¹¹⁾を発表、これこそ抗戦勝利の最大の保証だとした。またこの11月には、武漢大学で「どうしたら民衆を動員できるか（怎樣才能够發動民衆）」を講演し、民衆の苦痛の軽減（労働時間の短縮）、民衆の恒常的組織、人民の政治的自由、言論・出版の自由が民衆動員の鍵だと主張した。

こうして見てくると、たしかに陳独秀の中共「復党」、少なくとも協力に向けた動きが中共内にあったことがわかるのである。それは、中共の方針として1936年4月25日付の文書「中国共産党中央委員会の全国各党各派が抗日人民戦線を創立するための宣言（中国共産党中央委員会為創立全国各党各派的抗日人民陣線宣言）」⁽¹²⁾でも「中国トロツキー主義者同盟」が統一戦線の対象、しかもリストの第6番目と上位になっていることから、決して唐突な変化と言うわけではなく、

中共土着派の基本スタンスだったと考えることができるのである。また、同宣言は、1935年12月25日の瓦窑堡会議での「現在の政治情勢と党の任務についての中央の決議（中央關於目前政治形勢与党的任務決議）」⁽¹³⁾とも矛盾しないのである。曰く「どんな人であろうと、派であろうと、どんな武装隊列、どんな階級であろうと、日本帝国主義と売国奴蔣介石に反対でありさえすれば、みな連合すべきである……」と。

2. 陳独秀「復党」問題の頓挫と陳独秀・中国トロツキー派＝漢奸キャンペーン

ところが、王明、康生が1937年11月29日に帰国し、延安にのりこんでくると、中共党内では陳独秀との「復党」・協力問題は討論も不可能な状態となる。王明は言う。

「1937年末、私〔王明〕は延安に戻ると、毛沢東が陳独秀の代理人羅漢とすでに協議をまとめていることを知った。……私が延安に戻ったので、〔陳独秀の〕「党籍回復」の計画は危ういところで実現しなかった」⁽¹⁴⁾と。

王明・康生の帰国直後に、陳独秀・中国トロツキー派＝漢奸キャンペーンが中国国内で展開され始めたのである。

まず、12月4日、中共機関紙『解放』26期に王明が「日本侵略者の侵略の新段階と中国の闘争の新時期（日寇侵略的新段階与中国闘争的新時期）」を書き、「日本侵略者のスパイ機関は、必ずやさらに策を講じ、何とかして自分たちのスパイ、回し者、破壊者、暗殺者などを共産党の隊列に紛れ込ませようとするだろう。彼らはまず秘かに身を隠しているトロツキー—陳独秀—羅章龍匪賊分子の中から抜擢してこうした卑劣で凶悪な工作幹部とする」とした。

つづいて、12月9～14日の中共中央政治局会議で王明は、「いかに全国的抗戦を継続して抗戦勝利を勝ち取るのか？（如何継続全国抗戦

与争取抗戰勝利呢?)」と題する報告を行い、その中で「われわれはいかなる人とも抗日協力できるが、トロツキー派だけは例外である」「中国では、蔣介石及びその配下の反共特務などとも協力して差仕えないが、陳独秀とは協力できない」と述べ、さらに、陳独秀は「毎月日本から300円の手当てを受け取っている日本のスパイだ」と語り、これに対して席上、提出された疑義には「スターリンが今まさに雷鳴轟き、疾風吹きすさぶ反トロツキー派粛清を行なっているときに、われわれがトロツキー派と連絡をとるのは、やはりまずい」、「陳独秀がたとえスパイでなくとも、日本のスパイだと言いなすべきなのだ」と応じたのであった。

この結果、陳独秀の中共「復党」・協力問題は完全に消滅した。王明らはパリで刊行していた中共機関紙『救国時報』で、南京、武漢、西安で陳独秀と中共との間で「復党」、協力交渉が行なわれていたときから、一貫して陳独秀・中国トロツキー派＝漢奸キャンペーンを展開していたことに注意する必要がある。たとえば11月21日付『救国時報』は10月6日の陳独秀の華中大学での講演「抗戰の意義」などにも直接言及して非難している⁽¹⁵⁾。王明らの対トロツキー・中国トロツキー派のスタンスは1936年段階から一貫しており、それがそのまま延安にも持ち込まれたことは明らかである。スターリン派・王明と土着派・毛沢東らとの間には対陳独秀方針、陳独秀評価において大きな開きがあった。ここには、在ソ連の王明らと延安の毛沢東らとの通信手段の未整備から来る相互理解の不足といった問題も当然あるであろうが、それ以上に、王明らにとってはソ連・スターリンが最重要の擁護対象であるのに対して、毛沢東らにとっての最大関心事が、現前する中国の政治課題、つまり抗日問題であったことが容易に窺われよう。

そして、中国国内ではさらに陳独秀・トロツキー派＝漢奸キャンペーンが続いていく。1938年1月21日付『新華日報』掲載の陳紹禹（王明）「抗戰中のいくつかの問題（抗戰中の幾個問題）」は「トロツキスト匪」が「日本侵略者の意を受け、全力で抗日救国の事業を破壊しよ

うとしている」とし、2月8日、康生が『解放』30期で「日本侵略者のスパイ、民族の公敵トロツキー派匪賊を根絶やしにしよう（剷除日寇偵探民族公敵托洛茨基匪徒）」で「トロツキー派匪賊は『日本の中国侵略を妨げない』ことと引き替えに「日本が陳独秀の『トロツキー派匪賊中央』に毎月300円の手当てを与える」という取り決めを行なったと書いた。この論文は以後長く、中国、日本でも文字通りに真実と受け取られたため、その影響力は大きかった。3月12日付の『群衆』13期掲載の漢夫「日本侵略者の命令を執行するトロツキー派漢奸（執行日寇命令的托派漢奸）」は、「葉青・陳独秀らトロツキスト漢奸が「日本侵略者の命令を受けて暗殺を実行、漢奸別働隊を組織している」⁽¹⁶⁾と述べ、陳独秀・トロツキー派＝漢奸だと主張した。

ところでここで注目すべきは、先に触れたバリ発行の『救国時報』でも1936年10月5日から1938年2月5日までこのキャンペーンが続けられていたことである。王明・康生の延安到着によって、ソ連派・スターリン派の中共指導者と延安の土着派指導部の間にあった、陳独秀・中国トロツキー派に対する微妙な態度、論調の差はなくなり、王明らの帰国時点で一致を見ることとなった。毛沢東はこの点で明らかに王明らに譲歩したと考えられる。以後、陳独秀、中国トロツキー派は半世紀以上にわたり漢奸とされてきたわけであるが、そのことによって毛沢東は、政治的利益を得ることはあっても、不利を被ることはなかったのである⁽¹⁷⁾。

陳独秀・中国トロツキー派が漢奸であるという中共による規定が公式に撤回されたのは、1991年の『毛沢東選集』第二版の注であるが、これは毛沢東の「中国共産党の抗日時期の任務（中国共産党在抗日時期的任務）」（第一巻所収、1937年5月）や「持久戦論（論持久戦）」（第二巻所収、1938年5月）^(補注)のテキストに出て来る、陳独秀・中国トロツキー派＝漢奸説について、「トロツキー派と漢奸を並べて論ずるのは当時コミンテルン内部で流布していた中国トロツキー派が日本帝國主義のスパイ組織と関係があるという誤った論断に基づいてなされ

たものである」と注を付した。しかし、ここには巧妙な嘘がある。「コミンテルン内に流布していた論断」とすることで、間接的にスターリン派の王明や康生らにそのデマの責任を転嫁しているのだが、日本の資金提供を受けているとして陳独秀・中国トロツキー派＝漢奸説を最初に打ち出したのは、実は馮雪峰が書き、魯迅名で公表された「トロツキー派に答える手紙」であった。パリ『救国時報』はこれを根拠に陳独秀・中国トロツキー派＝漢奸キャンペーンを始めていたのである。

3. 陳独秀・トロツキー派漢奸説の成り立ち

最初に陳独秀や中国トロツキー派を漢奸に仕立てあげたのは「トロツキー派に答える手紙」(1936年6月9日執筆、『文学叢報』4期、『現実文学』1期、7月)である。これはスターリニスト的宣伝の極意を体現する、効果抜群の文書であった。馮雪峰は魯迅に送られてきたトロツキー派の出版物がきれいなことから次のように書いた。「私は君たちが印刷したとてもきれいな刊行物を見て、思わず君たちのために手に汗握りました。日本人が君たちに金を出して新聞を作らせているのだと、大衆の面前で君たちを攻撃するデマを飛ばすものがいたとして、君たちははっきりこの疑いを晴らせますか」⁽¹⁸⁾と。修辭的には断定は避けているが、この文章を読めば誰もがトロツキー派は日本軍の金を貰っていると解釈するであろう。実に巧妙な書きぶりである。

そして、「トロツキー派に答える手紙」が発表されると駐コミンテルン中共代表・王明はこれを8月27日付文書で、コミンテルン執行委員会常任委員でコミンテルン中国部のフローリンに報告している。王明はこの3日前、8月24日に執行されたジノヴィエフ、カーメネフらの処刑を支持し、スターリンへの忠誠を示したのである。また、この文書で王明は、「トロツキー派に答える手紙」のきっかけを作った原信の発信者である陳仲山を陳独秀のことだと断定している⁽¹⁹⁾。この

手紙をきっかけに中共がバリで出していた『救国時報』1936年10月5日付から反陳独秀・中国トロツキー派キャンペーンが始まる。「トロツキー派に答える手紙」こそが、陳独秀・トロツキー派＝漢奸説の根拠とされたのである。そして、このキャンペーンが継続されている間(1938年2月5日まで)、同書簡は一貫して言及され続けるのである。

なお、王明は上記のように、陳仲山を陳独秀だと思い込んでおり、さらにこれは1956～8年版『魯迅全集』でも陳仲山＝陳独秀と注記されていることから、少なくとも20年以上もの間、一般の中国人にとってはこれが常識であったと考えられる。そしてより重要なことは、王明は反陳独秀・トロツキー派＝漢奸キャンペーンに際しても、陳仲山＝陳独秀と思い込んでいたということである。つまり、「トロツキー派に答える手紙」は王明にとって陳独秀攻撃の大きな動機となったと考えられるのである。

ついで考察すべきは、毛沢東自身が「トロツキー派に答える手紙」を持ち出して1937年10月19日、魯迅一周忌の際、延安陝北公学で行なった「魯迅論」の講演である。毛沢東は「彼〔魯迅先生〕は一九三六年にはすでにトロツキー派匪賊の危険な傾向を大胆に指摘していた。現在の事実によって先生の見解が的確で正しかったことが完全に証明された。トロツキー派は漢奸組織となり、直接日本特務から手当を受け取っていることはすでに明白になった⁽²⁰⁾」と述べ、トロツキー派＝漢奸説を打ち出した功績によって、魯迅を賞揚した。毛沢東の魯迅への高い評価は陳独秀・トロツキー派＝漢奸説とセットで始まっていることは注目していい(魯迅を政治的に利用できるという点から毛沢東の魯迅礼賛は始まっているのだ)。ここで注目すべきは毛沢東が「トロツキー派は漢奸組織となり、直接日本特務から手当を受け取っていることはすでに明白になった」と言ったのは、1938年2月8日付『解放』30期が掲載した康生の論文「日本侵略者のスパイ、民族の公敵トロツキー派匪賊を根絶やしにしよう」が、陳独秀、中国トロツキー派が唐有壬からの金銭を受けとっていると指摘するよりも時間的に

かなり前だということだ。おそらく1937年4月25日付『救国日報』の記事による可能性が高い。そこには「中国のトロツキー派分子は、日本のスパイ機関と結託し、著名な親日派唐有壬の仲介で、〔日本側は中国トロツキー派に〕毎月一定の手当てを支給していた⁽²¹⁾」とある。管見の限り、トロツキー派と日本側の金銭授受の具体的やり取りが報じられた記事はこれが最初のものである。毛沢東はこうした情報を知っていたということになるが、この『救国時報』の記事は毛沢東の「魯迅論」講演の半年前のことで、パリから延安に届く時間的余裕は十分にあった。

最後に「トロツキー派に答える手紙」を書いた馮雪峰と、毛沢東、魯迅との関係を確認しておけば、馮雪峰は1926年入党の黨員⁽²²⁾で、魯迅とは1928年頃柔石（王凡西の同郷の知り合いでもある）を通じて知り、以後、魯迅の信頼を得た側近の黨員文学者である⁽²³⁾。牛漢の証言によれば、馮雪峰は瑞金の根拠地にいた1934年ごろには、毛沢東とも親しく、瞿秋白と三人で、魯迅談義をしており、毛沢東の魯迅への注目はこの頃から始まったというのである⁽²⁴⁾。

まとめ

1937年8月、陳独秀が国民党の獄から出て、中共への「復党」や中共との協力問題が両者の間で協議対象となるが、王明、康生の帰国によって始まった中共による陳独秀・トロツキー派＝漢奸キャンペーンが最終的にこうした動きを押し止めた。しかし、パリ『救国時報』誌上でのこのキャンペーン開始当初、そもそもの根拠とされたのは馮雪峰が書き、魯迅名義で発表された「トロツキー派に答える手紙」であった。

陳独秀・中国トロツキー派＝漢奸説は実は、コミンテルン内にあった風説というよりは、ソ連の報道をもとに、馮雪峰がこれを「トロツキー派に答える手紙」にうまく利用して作り上げたもの⁽²⁵⁾で、それ

をさらに今度はソ連にいた王明らが利用し、1936年秋から翌年2月にかけてはパリ発行の『救国時報』で反陳独秀・中国トロツキー派キャンペーンを始め、帰国後の1938年1月以降は中国国内で『解放』『新華日報』などでキャンペーンを張った。毛沢東も1937年10月の講演「魯迅論」では『救国時報』の記事に依拠して、陳独秀・中国トロツキー派を攻撃したのである⁽²⁶⁾。

こうした流れの中でも、コミンテルン、王明らの抗日統一戦線最優先戦略を真に受けた国内の中共指導部は1935年12月25日の瓦窑堡会議では日本帝国主義に反対するすべての勢力の連合を決議し、1936年4月の抗日統一戦線結成の呼びかけでは「中国トロツキー主義者同盟」を対象にするほどであったし、1937年7月の国民党との統一戦線結成後は陳独秀の「復党」も条件付ではあれ、視野に入れており、実際、陳独秀やその代理人羅漢のもとに葉劍英、博古、周恩来らを派遣していたのであった。しかし、同年11月、スターリンの中国における代理人、王明・康生が帰国すると、「誰とでも統一戦線を組むがトロツキー派だけはだめだ」という王明・コミンテルン・スターリンの強い意向で陳独秀の「復党」・協力問題も消滅したのであった。

注

- (1) 陳独秀「『新華日報』への書簡（致『新華日報』）」1938年3月20日、『掃蕩報』。『陳独秀文集』第3巻（平凡社東洋文庫）268頁。
- (2) 『陳独秀年譜』による記述は特に注記しないこととする。
- (3) 1898-1939。1931年5月、統一された中国トロツキー派の中央委員となるが、直後の指導部逮捕で、一時運動を離れる。1938年7月には北京大学同窓会からの委託で陳独秀の生活援助の任に当たる。翌年の日本軍の重慶爆撃で死亡、陳独秀の生活援助の任は何之瑜に引き継がれた。
- (4) 鄭超麟は8月29日に出獄し、陳鐘凡宅で陳独秀と会見後、陳独秀の手配で安徽績溪へ療養に向った。王凡西は11月28日にやっと出獄し、陳独秀が当時移っていた武漢へ向った。
- (5) 「トロツキー派分子対応に関する原則的指示（關於对待托派分子的

- 原則指示)」（一九三七年九月十日洛甫、毛沢東致林伯渠）『中央中央文件選集』第11冊（中共中央党校出版社、1991年）335頁。
- (6) 前掲注1、陳独秀「『新華日報』への書簡」。
- (7) 王凡西『双山回憶録（増訂版）』（香港士林図書服務社、1994年）265頁。
- (8) これに相当する文章は『陳独秀著作選編』全6巻には見出せない。
- (9) 周恩来が獄中の陳独秀を面会に訪れたという説があるが、根拠とされる黄理文の回憶録は信が置けないことが指摘されている。唐宝林『陳独秀全伝』（香港中文大学出版社、2011年）705～707頁。
- (10) しかし、魯迅一周忌の10月19日、毛沢東は延安陝北公学で「魯迅論」を講演し、「[魯迅先生は]一九三六年にはすでにトロツキー派匪賊の危険な傾向を大胆に指摘していた。現在の事実によって先生の見解が的確で正しかったことが完全に証明された。トロツキー派は漢奸組織となり、直接日本特務から手当を受け取っていることはすでに明白になった」とした（詳細は拙著『魯迅とトロツキー』第7章の注83などを参照のこと）。この時期に毛沢東がこうした講演をした意図や、何を根拠に中国トロツキー派が日本から金銭を受けているとしたのかは、本文で後述する。
- (11) 『宇宙風』52期。
- (12) 『中共中央文件選集』第11冊所収。なお、「中国トロツキー主義者同盟」という組織は実在しない。この時点での中国トロツキー派組織の正式名称は「中国共産主義同盟」。中共としては共産党の分派的名称を嫌って「中国トロツキー主義者同盟」としたのであろうか。
- (13) 『中共中央文件選集』第10冊所収。
- (14) 曹仲彬・戴茂林『王明伝』吉林文史出版社、1991年、294頁。出典は王明『中共50年』（東方出版社、2004年、内部発行）だとするが、確認中。
- (15) 香港馬克思主義研究促進会編『立此存照—中国共産党在法国巴黎機關報『救国時報』上刊登の有關中共整肅中国托洛茨基陳独秀派資料匯編』（2007年）所載資料による。「陳独秀漢奸言論（続）」（37頁）。
- (16) 以上の3件については、日本語版『陳独秀文集』第3巻271～272頁に注がある。
- (17) 延安整風は毛沢東による王明らソ連派追い落としを一つの目的としたが、王明らによる反トロツキーキャンペーンは、毛沢東ら土着派からすれば王明らのような舶来派、スターリン派批判の文脈にも利

用可能であったのである。

- (18) 『且介亭雜文末編』「附集」所収。
 - (19) 長堀著『魯迅とトロツキー』（平凡社、2011年）255～256頁。出典は唐天然「対斯大林清除異己の曲意配合——王明向第三國際呈報魯迅『答托洛斯基派信』」（『魯迅研究動態』1989年8期）
 - (20) 毛沢東「魯迅論」。『毛沢東集』第二版第五卷（蒼蒼社、1983年）。初出は1938年3月、漢口『七月』半月刊（胡風主編）。『六十年来魯迅研究論文選』（中国社会科学出版社、1982年）所載の1981年9月22日付『人民日報』掲載テキストには「托派成為漢奸組織（トロツキー派は漢奸組織となり）、……」の一文は削除されている。『毛沢東文集』第二卷（人民出版社、1993年）も同様。
 - (21) 前掲注15『立此存照—中国共産党在法国巴黎機関報『救国時報』上刊登的有關中共整肅中国托洛茨基陳独秀派資料匯編』14頁。
 - (22) 包子衍著『雪峰年譜』（上海文芸出版社、1985年）26頁。
 - (23) 同上、31頁。但し、同書24頁によれば、魯迅の北京時代、1926年8月5日に一度魯迅を訪問したことがあるという。
 - (24) 牛漢他座談会「人間魯迅」『讀書』（1998年第9期）。長堀著『魯迅とトロツキー』324～325頁で引いている。
 - (25) 長堀著『魯迅とトロツキー』254～255頁。
 - (26) ただし、この1937年10月という時点では、毛沢東は陳独秀の「復党」・協力問題に関しては王明らとは違い、条件付容認の立場であった点は留意しなければならない。なぜ、この時点で毛沢東は陳独秀・中国トロツキー派＝漢奸説を講演で話したのかはさらに検討の余地がある。王明らの翌11月末の帰国予定を知っていて、陳独秀の「復党」問題の帰趨によって政治的打撃を受けることのないように、予防線を張っておいたということか。いずれにせよ、この講演内容は後の陳独秀「復党」・協力問題での毛沢東の王明らに対する譲歩をより容易にするものであったことは間違いない。
 - (補注) 毛沢東のこの二編におけるトロツキー派言及については詳しい分析を要するが、本論では紙幅と時間の関係で省略に従う。
- （本論は2017年10月28-29日に名古屋大学で開催された『第12届東亜学者現代中文文学国際学術研討会』「文学革命的百年 伝承、暗流及特異点」で筆者が発表した中国語論文をもとに、加筆訂正の上、日本語に直したものである。また本発表及び本論は2017年度科研費基盤研究（C）「周氏兄弟と『新青年』グループ」の成果の一部である。）